

人文科学論集 第 48・49 輯合併号 (2003.3)

600 年後の和解

—— 異端者ヤン・フスの名誉回復 ——

薩 摩 秀 登

1. 「哀惜の念」

1999 年 12 月 15 日から 18 日にかけて、ヴァティカンのラテラノ大学で、あるシンポジウムが開かれた。タイトルは「ヤン・フスについての国際シンポジウム」である。その 3 日目の 17 日には、ローマ教皇ヨハネス・パウロ 2 世が出席して声明を読み上げ、その中で次のように述べた。「重要な一千年期を前にした今日、私は、ヤン・フスに課せられた過酷な死について、そしてその結果としてチェコの人々の頭と心の中に生じ、紛争と分裂の原因となった傷について、深い哀惜の念を表明しなければならないと感じています。すでに私は最初にプラハを訪問した際に、キリストにおける和解と真の一致において大きく前進することが可能であろうという期待を表明しました。過去数世紀にわたる傷は、新しい見解を求めていくことにより、そして全く新しい見解を築いていくことによって、癒されなければなりません。」⁽¹⁾

ここで主要なテーマとなっている 15 世紀の宗教改革者ヤン・フスという人物のことを論じる前に、この国際シンポジウムの開催に至った過程について、少し述べておこう。

教皇が自ら述べているように、彼はチェコスロヴァキア（当時）の社会主義体制が崩壊した翌年の 1990 年 4 月、プラハを訪問した。社会主義政権下における、宗教活動に対する厳しい制限から解放されたばかりのチェコスロヴァキア国民が、この訪問を熱烈に歓迎する中で、教皇は「フスを教会改革者たちの中に、より正確かつ正しく位置づける必要がある」こと示唆した。これを受けて、1993 年には、チェコを含めた数カ国の教会代表者および歴史家や神学者たちの参加を得て、ドイツのバイロイトで、「時代・民族・宗派の中のヤン・フス」というシンポジウムが開かれた⁽²⁾。

そして同じ年に、チェコ出身の枢機卿でありプラハ大司教でもあるミロスラフ・ヴルクは「ヤン・フス師の人物、生涯、業績に関する諸問題を研究する委員会」を創ることを呼びかけ、ここにはローマ・カトリック教会および福音派教会の代表に加えて、チェコ共和国科学アカデミーや、プラハのカレル大学、ブルノのマサリク大学、オロモウツのパラツキー大学の研究者たちが集まった。間もなく迎えることになる西暦紀元 2000 年を前にローマ・カトリック教会においてさまざまな行事が計画されている中で、フスに関してチェコの司教会議とローマ教皇庁との間でも対話が予定されて

おり、そのための準備を進めるのが、この委員会の役目であった。こうした積み重ねを経て、2000年を迎える直前に、聖・俗各方面の代表が集まってフスに関する上記のような盛大なシンポジウムが実現した。これは、紀元2000年大記念祭中央委員会、チェコ司教会議、チェコ共和国科学アカデミー、そしてカレル大学の共催という形で行われた。そこでなされたのが、教皇の上のような発言だったのである。

この1999年末という時期は、1989年末に東欧諸国の社会主義体制が崩壊して、「宗教の自由」が回復されてからちょうど10年後にあたる。この時点で教皇がフスの死とその後生じた混乱に対して「深い哀惜の念」を表明したという事実は、東欧諸国の体制変革がもたらした一つの長期的な結果としても興味深い。それ以上にこの発言は、フスという人物をめぐるローマ・カトリック教会の中に、いまだに未解決の問題が存在していたことを、多くの人々に改めて印象づけることになった。ではそのフスとはどのような人物なのか。そしてフスをめぐってローマ・カトリック教会は、どのような問題をこれまでかかえてきたのか。そして教皇の上のような発言にいたる一連の動きは、何を意味するのであろうか。

2. ヤン・フスとフス派⁽³⁾

ヤン・フス（1370年頃～1415年）は、おそらく南チェコ出身の聖職者で、プラハのカレル大学で学び、その教授に、さらには総長にまでなった人物である。同時に彼はプラハ旧市街にあるベトレーム礼拝堂で多くの聴衆を対象に説教を行い、聖書の教えに忠実に、正しい生活を送るように呼びかけた。しかし、キリスト教徒にとって最高の規範は聖書であるとする彼の説は、もしもこれを厳密に適用するならば、キリスト教世界における教皇の絶対的權威を否定することにつながった。特に14世紀から15世紀にかけての時期は、いわゆる教会大分裂（1378年～1417年）という状況下で、教会による世俗的権利の行使や財産所有に対して各方面から批判が生じており、フスもまた、そうした批判者たちの一人であるイングランドの神学者ジョン・ウィクリフ（1320年頃～1384年）の説に多大な影響を受けていたのだった。そして教会当局は、こうした批判者たちを、教皇への不服従を民衆に広める危険人物として厳しく取締っていたのである。

プラハで教会批判を展開していたのはフスだけではなく、カレル大学には同じ見解を持つマギステルたちが多数集まっていた。「ウィクリフ派」とも呼ばれた彼らは、積極的にチェコ国王ヴァーツラフ4世に働きかけて、敵対する「反ウィクリフ派」の排除を試み、1409年にカレル大学から反対者たちは事実上追放された。また、基本的にウィクリフ派に好意的であった国王は、「教会を監督する役割は世俗権力にある」というウィクリフ派の主張どおりに、国王に従わない聖職者の追放や教会財産没収などを強行した。これはチェコ社会を大きく動揺させ、また全ヨーロッパ的にも放置できない問題となっていた。

こうした運動の中心人物とみなされたフスは、プラハ大司教によって破門されてプラハを退去しなければならなくなったが、彼自身は、公式な場で議論ができれば、自分の説が聖書に照らして全

く間違っていないことを立証できると考えていた。彼がその機会と捉えたのが、1414年から1418年にかけて開催されたコンスタンツ公会議である。公会議を呼びかけたドイツ国王ジクムントは、フスを正式な参加者として招聘したが、コンスタンツに到着したフスは明確な理由がないままに捕縛された。そして1415年6月に3回にわたる議論の場が与えられたが、これは事実上は、教会の指図に従って自説を撤回するかどうかの決断をフスに迫るだけの場であった。フスは、自分の説のどこが聖書に照らして間違っているか教えて欲しいと要求したが、聞き届けられなかった。そして7月6日、公会議によって異端者として断罪され、即日、コンスタンツ郊外で火刑に処せられたのである。

ここで重要なことが二点ある。一つは、フスは確かに異端者として処罰されたが、彼自身は自分が教会に反抗しているわけではないと最後まで主張していたことである。むしろ彼は、権力と財産を集中させた現実の教会の方が本来の姿から逸脱しているとみなしていた。そして本来あるべき「貧しい」教会でなければ人々を救うことはできないと考え、教会と聖職者の道徳的純化を求めていたのであった。重要な点のもう一つは、フスを断罪した公会議自体、教会分裂を解決することと同時に、教皇にあまりに権力が集中しすぎた現状を改革する意図をもって開かれたものであり、その限りで公会議の理論的指導者たちとフスとの立場は近かったということである。すなわちフスのような主張は、当時はかなりの説得力を持っていたし、彼の説に多かれ少なかれ賛同する人々もいたのであった。そもそも、最高の規範は聖書であるというフスの主張を正面から否定することは誰にもできなかったはずである。

ではなぜフスは断罪されなければならなかったのか。筆者には神学理論に立ち入る力は全くない。しかしあえてフスと教会当局との考え方の違いを要約するならば、聖書が最高の規範であるという原則をそのまま現実に適用させ、聖書を根拠に教皇を批判することでさえ許されるとするフスに対して、教会側は、聖書を解釈し、その教えを広める権限は教会にあり、これを否定してすべての人々に聖書の自由な解釈を許せば世界は混乱に陥ると考えた、ということになるだろう。その違いが結局はフスを異端者の側においやったのである。従ってこの議論は、キリスト教的秩序はいかに打ち立てられるかについての見解の相違にもとづくのであり、単に急進的で過激な改革者フスを保守的な教会当局が断罪したと解釈することはできないのである。

そもそも中世西欧の教会によって異端者と断罪された者が、いつでも正統な教義から逸脱していたとは限らない。むしろ、現実の社会に適応するために多くの財産や権限を手中にした教会に対して、聖書にもとづいた原理主義的立場から容赦ない批判を加えた人物が、異端として断罪されることが多いのであって、フスという人物もその典型的な例とみなして良いだろう。フスは本当に断罪されなければならない人物だったのか。当時から議論になったこの問題が、結局は数百年後に再びとり上げられることになるのである。

しかもフスの火刑は甚大な結果をもたらした。これをチェコという国に対する侮辱と受け取ったチェコの支配層の一部は、今やフス派と呼ばれるようになった改革派を中心に結集した。彼らは、ローマ・カトリック教会の教義に反して、聖体拝領をパンと葡萄酒の二種（当時のローマ・カトリッ

ク教会ではパンだけの一種）で行うといういわゆる二種聖餐を採用し、これがフス派の基本的教義となった。フス派の間では、チェコ人こそ「正しい信仰の民」であるとする一種の選民思想も芽生えつつあった。1419年にヴァーツラフ4世が死去すると、事実上フス派がチェコの政権を掌握する状態になったため、翌年、教皇は彼らを異端とみなして、これを撲滅するために十字軍の派遣を呼びかけた。こうしてついにチェコはローマ・カトリック教会を相手に戦争状態に突入したのである。ただしチェコにもカトリック勢力は一定程度存在したし、フス派の中にもあらゆる妥協を拒む急進派と、早期和解を望む穏健派との間で激しい対立が生じていた。冒頭に示した教皇ヨハネス・パウロ2世の発言にある「紛争と分裂」が第一にこの「フス派戦争」を指していることはいうまでもない。

この戦争は、チェコの軍事的制圧を断念した教会側が、1434年にチェコの代表をバーゼル公会議に呼び出して和解交渉を進め、1436年に両者の間に正式な和解（バーゼル協約）が締結されることで終わった。公会議側は、チェコとモラヴィアにおける二種聖餐の実施を条件付きで承認し、そうした上でフス派が完全にローマ・カトリック教会に復帰したことを宣言した。

しかしすでにこの時点で、チェコの人々は事実上、フス派とカトリックという二つの宗派に分裂していた。しかも厄介なことに、ローマ・カトリック教会内部においても教皇と公会議との主導権争いという深刻な問題が生じ、1462年に教皇ピウス2世がバーゼル協約の無効を宣言したために、フス派は立場上、再び教会との戦争状態に戻ってしまったのである。この後、チェコでは宗教をめぐってしばしば争いが起こり、しかも16世紀に入ると、ルター派などのプロテスタント諸派による教会改革の影響が及んだために、宗教事情はさらに混沌とした状況に陥った。この時期にチェコを統治していたハプスブルク家の国王たちは宗教問題については融和路線に傾いており、彼らの努力の結果、教皇はようやく1564年にチェコとモラヴィアにおける二種聖餐の実施を認めたが、すでにこの措置にはほとんど意味がなかった。フス派の中心勢力は1572年に基本綱領である「チェコの信仰告白」を国王に提出し、プロテスタントの一宗派として独立する姿勢を明確にした。

こうした「宗教の自由」は、1609年に国王ルドルフ2世がほぼ完全な信仰の自由を認めることでほぼ完全な実現を見たが、その9年後の1618年、チェコのプロテスタント貴族たちがハプスブルク家に対して起こした反乱が、転換点になる。1620年にプラハ近郊のビーラー・ホラでプロテスタント同盟軍を壊走させたハプスブルク家は、1627年の「改訂領邦条令」によってチェコにおけるカトリック以外の宗教を禁止し、フス派を含めたプロテスタントには改宗か亡命を強いたのであった。こうして約2世紀にわたるチェコのフス派教会の歴史は一旦幕を閉じることになる。国外に避難所を求めたフス派のうちで、唯一命脈を保ったのは、「チェコ同胞団」と呼ばれる最も急進的な一派であった。彼らはすでに16世紀から、迫害を逃れるために国外のプロテスタント貴族などの保護を頼る生活を続けており、17世紀以降は、主にドイツのザクセン地方を拠点に、「ヘルンフート兄弟団」と呼ばれる宗派となって、活動の場を広げていったのであった⁴⁾。

3. 近代以降のチェコと教会

その後、チェコではカトリック教会の権威とハプスブルク家の権威を二本柱とする絶対主義時代が続いたが、約一世紀半が経過した 1781 年に啓蒙専制君主として知られる皇帝ヨーゼフ 2 世が発布した「宗教寛容勅令」により、チェコでもプロテスタント信仰は再び自由となった。ただしこの寛容勅令の対象となったのはルター派や東方正教会だけであり、正式にはフス派は対象となっていない。しかし啓蒙思想の洗礼を経た後のハプスブルク君主国で、信仰上の束縛は事実上取り除かれたといってよい。これをきっかけにして、その後一世紀ほどの間に、チェコではかつての教会改革者フスの崇拜の復活という現象が起るのであるが、それは後で述べるとして、ここではまず現在までのチェコにおける宗教事情についてごく簡単にたどっておくことにしよう⁽⁵⁾。

チェコでは 17 世紀以来のカトリック化政策が着実な成果をあげたため、住民の間にカトリックの信仰は非常に深く根づいていた。寛容勅令の後、プロテスタントも一定の勢力を築いたものの、カトリックの優位は崩れなかった。しかし 19 世紀にチェコ人が民族としての自覚を徐々に形成していく過程において、教会が社会的あるいは政治的に積極的な役割を果たすことはなかった。たとえばポーランドなどの場合、国家の分割および消滅という状況下で教会が社会統合において重要な役割を果たしたのだが、チェコの状況はこれとはむしろ対照的であった。チェコにおいては、ローマ・カトリック教会はハプスブルク君主国の体制を支える勢力とみなされ、チェコ人としての自覚を強調する人々からは、しだいに批判的に見られるようになっていったのである。

そして第一次大戦においてハプスブルク君主国が敗戦国となり、チェコがスロヴァキアと合同して新興国家「チェコスロヴァキア共和国」を誕生させることが確実となると、チェコのカトリック教会は非常に困難な状況に陥った。「ウィーンからの自立」に続いて、「ローマからの自立」も実現させるべきだとする主張が高まり、大戦末期の 1918 年 11 月 3 日にはプラハ旧市街広場にあった聖母マリア記念柱が引きずり倒された。共和国成立後は、国家と教会の完全な分離が要求され、あらゆる教会財産の没収さえ求める声が上がった。

共和国政府は実際にカトリック色払拭を進め、たとえば 1925 年の祝日法では、聖母マリア関係の 3 つの祝日や、17 世紀以来のチェコの国民的聖人ヤン・ネボムツキーの祝日が廃止されたりした。その一方でこの年のフスの命日はマサリク大統領出席のもとで盛大に祝われ、ローマ・カトリック教会の神経を逆撫でした。

しかしこうした事態にもかかわらず、住民の大部分が最終的にはカトリックから離れなかったことは注目に値する。1930 年の調査では、チェコスロヴァキアの人口 1393 万人のうち 1062 万人 (76.2%) がカトリックを信仰している⁽⁶⁾。共和国政府はこうした国内事情を考慮し、また国際社会における共和国の安全を図るためにローマ教皇庁との関係修復にも力を注ぎ、1927 年には両者の間で和解文書「モドゥス・ヴィヴェンディ *modus vivendi*」が取り交わされた。これは、チェコスロヴァキア国内の司教指名の権利は教皇庁にあるが、重大な理由がある場合には共和国政府はこ

れを拒絶できるとするなど、両者の妥協の色合いが濃いものであった。翌 1928 年にはチェコスロヴァキアとヴァチカンの関係がようやく正常化した。これを記念するかのように、1929 年にはチェコの半ば伝説的な聖人君主ヴァーツラフの死去一千年祭が、盛大に祝われたのである。

その後チェコのカトリック教会は、1939 年から 45 年までのドイツによる保護国化の時代と、1948 年から 89 年までの社会主義政権時代の厳しい状況を潜り抜け、現在でも一応、この国の最も有力な教会である。しかし 20 世紀を通じていわゆる「宗教離れ」が進んだこの国において、その比率は決して高くはない。社会主義政権崩壊後の 1991 年の国勢調査では、カトリックを信仰すると答えた人は人口の 39.0%であったが⁷⁰、これはチェコにしては例外的に高い数字といえる。ただしこれは宗教活動が極度に制限されていた時代からの一種の「揺り戻し」現象とみるべきであろう。2001 年の国勢調査ではその割合は 17.6%にまで低下している。一方、信仰なしと答えた人は 67.3%にのぼる。

カトリック以外の二つの有力宗派についても見ておこう。上に述べたような、第一次大戦直後のチェコスロヴァキアにおける激しい批判に直面したカトリック教会人たちは、1919 年に「カトリック聖職者連合会」を結成し、チェコ語による典礼や聖職者の妻帯の認可などを含む要望書をローマに送ったが、ローマ教皇庁はこれを部分的にしか認めなかった。しかも新任のプラハ大司教コルダチによって「連合会」は解散させられたため、これに反発する聖職者たちは翌 1920 年 1 月に分離して「チェコスロヴァキア教会」を創り、人々にローマ教会からの離反を呼びかけた。この新しい教会への所属を表明した人々は 50 万人を越え、1930 年には 80 万人に達した。このチェコの現代版「国家教会」は、教義の面でカトリックを踏襲するか、あるいは独自路線をとるかで揺れ動いたが、しだいに後者が主流になり、新約聖書の原則に忠実に立ち戻ることを基本路線とした。この教会は第二次大戦後の社会主義政権下においても一定の活動を続けており、1971 年には「チェコスロヴァキア・フス派教会」の名称が議会で正式に承認されている。フス派教会を名乗っているが、直接フス派の系統をひく教会ではないことは、以上の経緯からも明らかである。この宗派に所属する人は、1991 年で 1.7%、2001 年で 1.5%であり、ごくわずかな勢力にとどまっている。

一方、18 世紀末以来、チェコで一定の勢力を築いてきた福音派は、1918 年に「福音派チェコ同胞教会」を創設し、現在に至っている。人口に占める割合は、1991 年で 2.0%、2001 年で 1.4%である。

これらの数字からもわかるように、現在のチェコでは宗教は非常に低迷状態にあるといっていよい。わずかな信者のほとんどはカトリックで、非カトリックの勢力は極めて微弱である。チェコの人々が大勢において、教会や宗教に対して冷淡あるいは無関心な態度をとる傾向があることは否定できないだろう。

ではこのような展開をたどった近現代チェコの教会の歴史の中で、かつてヨーロッパ全体を揺るがすほどの大事件を巻き起こしたフスやフス派は、どのようにとりあげられてきたのだろうか。そしてどのような経緯で、冒頭にあげたような教皇の声明に至ったのだろうか。もう一度時代をさかのぼって、その状況をたどってみよう。

4. フスをめぐる論争

17 世紀から 18 世紀にかけてのカトリック全盛の時代にあって、フスやフス派は、本国のチェコにおいてすらその存在を多くの人々から忘れられていた。再びこれらに注目したのは、少々意外だが、19 世紀前半のドイツの自由主義者たちであった⁽⁹⁾。ドイツの各地には、数百年前にフス派の軍隊と戦った時の記憶が、半ば伝説化されつつもなおも残っていた。旧体制の打破を目的とする自由主義者たちの目には、フス派は封建的勢力に果敢に挑戦した「自由の闘士」の先駆のように映ったのである。

そしてこの見方を、新たに形成されつつあるチェコ民族という別の視点からさらに読み替えたのが、F. パラツキーを始めとするいわゆるチェコの「民族覚醒者」たちであった。彼らはフスやフス派の闘争を、封建的抑圧に対する戦い、ローマ・カトリック教会の教権的支配に対する戦いとして、さらには強大な「ドイツ民族」に対する「チェコ民族」あるいは「スラヴ民族」の戦いとして解釈したのである。それは、チェコ人の民族的自覚を促すうえで大きな効果をあげたが、決して過去の歴史を何らかの政治的なプロパガンダの手段として用いようとするものではなかった。

しかしこうした一種の民族史観によるフス解釈は、19 世紀後半になって急速に政治的色彩を帯びていく。ハプスブルク君主国の中でのチェコ民族の政治的権利強化をめざす民族自由党、通称「青年チェコ党」やその支持者たちがその中心にいた。1868 年 7 月に、フス処刑の地コンスタンツまで約 200 人による巡礼が行われたのも、そうした運動の一環であった。こうした人々は、ローマ・カトリック教会を時代遅れの勢力とみなし、それがいかに「反社会的」あるいは「反チェコの」であるかをさかんに述べた。さらに 1889 年には、フスの記念碑をプラハに建てようとする運動が起っている。これは第一次大戦中の 1915 年 7 月 6 日、すなわちフスの処刑 500 年の記念日に、プラハの旧市街広場でフスとその支持者たちの記念像の除幕式が行われることで実現した。彫刻家 L. シャロウン作になるこの悲壮感あふれる大規模な作品は、民族の英雄としてのフスのイメージをみごとに表現したものとなっている。こうした運動を熱狂的に支持したのは、フスを神聖な殉教者として祭り上げ、フスやフス派の伝統の中に「チェコ民族の偉大な歴史的役割」を見出し、ローマ・カトリック教会との関係悪化や絶縁をも辞さない人々であった。

しかしこうした運動は、ローマ・カトリック教会を刺激するばかりか、ハプスブルク帝国政府との協調を重視するチェコの保守派の反発をも招く恐れがあったため、これを批判的に見る人々もいた。リベラルな立場からフスを論じた歴史家 J. カロウセクもその一人である。彼は、フスを断罪したコンスタンツ公会議の決定は誤りであると論じたが、これは決してローマ・カトリック教会を非難する意図から出た主張ではない。むしろ、フスが正しい教会改革者であったことが認められることにより、フスを賛美する人たちとローマ・カトリック教会との協調が図られるのが目的であった。カロウセクによれば、16 世紀半ばに開かれたトレント公会議によって、フスが論じた改革は全ヨーロッパの規模で基本的な実施されたとみなされるので、フスと同じ主張で現在のローマ・カ

トリック教会を批判するのは正しくないということになる。フスは彼の生きた時代の状況の中で評価されるべきであり、彼を政治的な意図で表面的にとりあげて、チェコ社会に対立を招くのは避けるべきである、というのがカロウセクの主張であった⁽⁹⁾。

フスの裁判の見直しを要求する重要な論拠の一つに、この裁判自体に重大な誤りが含まれていることの指摘があった。特にとりあげられたのはいわゆる化体説、すなわち聖体の秘蹟においてパンはキリストの肉に、葡萄酒はキリストの血に変わるというカトリックの根本教義の問題である。フス自身の著作やコンスタンツでの発言からすれば、フスがこの説を否定した事実はないのだが、それにもかかわらず彼はあたかもこれを否定したかのように訴えられた。フスの裁判を批判する人たちは、この訴えは明らかに誤解か悪意にもとづくものであり、フス自身が繰り返しこの訴えに全く根拠がないことを主張しているにもかかわらず、公会議によって聞きいれられなかったとして、この裁判が不正に行われたことを主張したのであった。

こうした議論は、フスが多くのチェコ人によって英雄視され、神聖視されている一方で、チェコ社会にカトリック教会がほぼ完全に定着しているという事態にどのように対処するかという切実な問題から生じたものである。そして国際的に見ても、ヴァティカンとの間にあまりの摩擦が生じれば、チェコ社会の安定のために悪影響が生じることは否定できなかった。さらに付け加えるならば、チェコで民族の権利がさかんに喧伝される中で、カトリック聖職者たちの間にさえ一種の民族意識の高揚が見られ、フスを民族的英雄と見る傾向から彼らも全く自由ではなかったことも指摘しておくべきだろう。

しかし一方で、フスを正しいカトリックとして再評価し、あるいは名誉回復させることに対しては、急進的な民族主義者およびプロテスタント系の人々からの反発があった。彼らにとってフスは、あくまで「教権的ローマ・カトリック教会に命がけて反抗した英雄」として意味があったのであり、彼がカトリック教会の祭壇に聖人のように収まってしまうのは、耐えられなかったのである。

このように、大勢としてはカトリック国であるチェコにおいて、フスの解釈をめぐる問題は、常に懸案事項として残されていた。そしてそれが未解決のまま、1918年のチェコスロヴァキア共和国成立を迎えた。この国では、500年前の一人の異端者をどのように位置づけるかという問題が、社会全体で、特に教会人や歴史家などの間で常にある種のわだかまりとなって残り続けたのである。

しかし第二次大戦後には、この問題は徐々に人々の関心と呼ばなくなっていった。社会主義時代の公式な歴史解釈では、フス派の運動は市民革命や社会主義革命の先駆として位置づけられ、フス自身も社会変革者、民衆運動指導者あるいは革命家のように解釈された。こうした世俗的解釈が体制側によって行われていた時代には、そもそもローマ・カトリック教会との公式な対話はありえなかった。そして上に見たようにこの時期にはチェコの一般市民の間でも宗教離れが進んだので、フスをめぐってヴァティカンと議論する必要性さえ、すでにあまり感じられなくなったまま、20世紀後半という時代が経過していったのである。人々の意識の中で、フスやフス派はなおも偉大な存在として記憶されつつも、かつてのような熱狂はすでに過ぎ去り、フスの名誉回復という問題も、すでに大方の人々の関心からは遠ざかっていた。

しかし、「ローマ・カトリック教会との過去のわだかまり」は忘れられたわけではなかった。それを新たに表明したのが、1965 年の第二ヴァティカン公会議における枢機卿兼プラハ大司教ヨゼフ・ベランの次のような発言である。「私の国でも、カトリック教会は、その名前で過去において良心の自由に反して行われたことのために苦しんでいる。すなわち 15 世紀のヤン・フスの火刑、そして 17 世紀に『君主の宗教はその国の宗教 *cuius regio eius religio*』という原則に従ってチェコ民族の大部分にカトリックの信仰が外から強制され、この原則が実施されたことである。世俗権力は、本当にカトリック教会に奉仕しようとしたか、あるいは少なくともそれを装ったにせよ、実際にはそうした行動によって民族の心に癒されることのない隠れた傷を負わせた。このトラウマは宗教生活の進展を妨げ、教会の敵に安易な批判の口実を与え、今も与えている。」⁽¹⁰⁾

しかしチェコ人からのこうした発言はむしろ例外的であり、この時期にフスの名誉回復の道を準備したのは、主に国外の研究者や教会人たちであった。1965 年にコンスタンツの文書館員オットー・フェーゲルは、教皇パウロ 6 世にフスの名誉回復と、さらには列聖さえも求めたのであった⁽¹¹⁾。そしてさらに重要な役割を果たしたのが、ベルギーのベネディクト会修道士 P. デ・フォークトの著書『ヤン・フスの異端』である⁽¹²⁾。彼は、フスの誤りは、教会批判をラテン語でなくチェコ語で行ったこと以外に存在しないと主張し、さらに、教皇の首位性をフスが否定したのが死に値するならば、公会議の権威が教皇の権威よりも高いと主張した神学者たちはなぜ許されるのかと疑問を投げかけた。彼の主張に対してはチェコの教会人や歴史家からもさまざまな反響が寄せられた。フスについての国外の議論は、地下出版の助けなども得てチェコ国内にも伝えられ、ローマ教皇庁をも含めて、フスに対する従来の見解を見直そうとする動きがあることが、チェコスロヴァキア国内でもかなり知られていたのである。

そうした状況下で、1989 年に共産党政権が崩壊し、宗教活動の自由が回復された。社会主義の公式のイデオロギーが失墜し、西欧的民主主義という価値観が一举に支配的になる中で、西欧的価値観の一部である「カトリック」への回帰という現象も一時的に生じた。そしてローマ教皇が自らプラハを訪問し、プラハとヴァティカンとの間の障壁が取り払われたことが確認された時、フスおよびフス派の問題が今度こそ解決されるとする期待が生じたとしても、不思議ではなかった。

こうして 90 年代に、教皇庁やチェコの教会関係者を中心にして、フスの名誉回復の動きが徐々に始まるのだが、この問題をめぐるチェコ国内の状況はすでに百年前とは大きく変っていた。いまだに多くの人々によってフスはチェコの歴史上最大の偉人として扱われてはいるものの、かつてのような民族の英雄としての礼賛はすっかり影をひそめ、また社会主義時代に強調された民衆運動指導者としてのイメージも、多くの人々にとってはすでに魅力を失っていた。そうした中でフスを高く評価する時にしばしば用いられたのは、フスはいかなる方面からの圧力にも屈せず、普遍的真理のために死をも恐れずに行動した、という捉え方である。

こうした、「普遍的真理に殉じた人物」としてのフスのイメージは、カトリックかプロテスタントかという立場の違いを超えてその偉大さを強調するのにまさに適していた。1996 年に枢機卿ヴルクがフスの生地とされる南チェコのフシネツで次のような発言を行ったという事実が、こうした

傾向をよく示している。「ヤン・フスはカトリックの聖職者でした。そして今の私と同じ司教の地位にかつてあった人物によって、プラハ司教区の改革のための説教師に任命されていました。（中略）そして当時のカトリック教会、および教皇庁の、混乱した好ましからざる状況の犠牲となりました。（中略）あの時代と、そしてそれがもたらした結果について——その中にはヤン・フス師の死も含まれるのですが——、遺憾の意を表する必要があります。そして私もそうしているのです。今の時代の教皇たちの道徳的権威についてはよく知られています。そして彼らは我々カトリック教徒に対し、過去の自分たちの誤りを公的にも認める勇気を持つべきであると明確に促しています。（中略）真実は我々を解放するのです！」⁽⁴³⁾ フスに関するこうした態度表明が、教皇ヨハネス・パウロ2世のもとで積極的に進められているエキュメニズム的傾向と同じ線上にあることは明らかであろう。

こうした和解の動きが優勢になっていく中で、冒頭に示したようなフス再解釈に向けての一連の準備が進められ、そして1999年12月のヴァティカンにおけるシンポジウムの開催、およびその席上での教皇による「深い哀惜の念の表明」に至ったのである。

ここで注目しておかなければいけないことが一つある。1999年12月17日の教皇の発言は、極めて率直に過去を悼んではいるものの、フスに対する異端宣告は誤りであった、あるいはコンスタンツ公会議の決定は取り消されなければならない、とは決して述べていないことである。フスが完全に「名誉回復」されること、さらには聖人の列に加えられることまでが一部で期待されていたこと⁽⁴⁴⁾を考えると、これはあまりに不十分という印象を与えるかもしれない。しかしいかに数百年前のものとはいえ、教皇や公会議が一度下した決定を取り消すことは極めて困難であることを考慮すれば、この発言でさえフスをめぐる従来の教皇庁の態度の大きな転換と解釈されなければならない。事実、ヴァティカンのシンポジウムの参加者たちからは、この発言は大きな満足をもって受け止められているのである。これはフスの事実上の「名誉回復」であり、フスやフス派をめぐって19世紀以来チェコやヴァティカンにのしかかっていた懸案は、これで最終的に取り払われたというべきであろう。

では、20世紀の終りになって15世紀の異端者をめぐる和解が成立したことは、どのような意味を持つのだろうか。最後に、この教皇の声明をめぐるチェコ国内の反響をいくつか引用しながらこの点について考えてみたい。

5. 議論は終わったのか

シンポジウムの参加者たちは全体として教皇の発言とこのシンポジウムの成果に満足の意を表明している。特に、これまでのフス解釈において、あまりにさまざまな政治的および宗教的「色付け」が行われてきたことを反省し、今こそ先入観にとらわれずにフスを正しく歴史の中に位置づけることができるという期待は大きい。たとえばオロモウツのパラツキー大学のキリロス・メトディオス神学部教授F.J. ホレチェックは次のように述べる。「第一共和政時代（筆者註：1918年から1938年

までのチェコスロヴァキア共和国を指す)に行われた見方に関してですが、フスは事実上我々にはすでに何も語っていないということを多くの政治家や歴史家が確認する勇気を持たなかったのは残念なことです。したがって、フスに関しては、パラツキーの時代から生じてきた逸脱から、本当の内容へと戻るように努力することが必要です。』⁽¹⁵⁾

ここでホレチェックが主張するような客観的な立場からの研究は、実際には、第二次大戦後のチェコやドイツの歴史家たちを中心にすでに積極的に進められ、多くの成果を生み出している。さらにさかのぼるならば、この主張は 19 世紀後半にフスやフス派の民族主義的解釈を批判したカロウセクなどの歴史家にも通じる。ただしカロウセクの主張自体も、当時のチェコ社会の分裂を危惧する穏健なリベラル知識人としての政治感覚を反映したものであった。したがって、ホレチェックが語るこの意味は、20 世紀の終りになってようやく、フスの問題が民族史観による礼賛、社会主義政権の公式史観による英雄化、そしてローマ・カトリック教会の公式見解による断罪など、あらゆる「偏り」から解放され、ついにヴァティカンとの間にさえ基本的一致を見出したことに意義がある、という点にあるといえる。

しかしチェコからの一般の反応は、これよりもかなり冷ややかなものであった。たとえば同じ日の同じ新聞には D. カイゼル氏の次のような発言が掲載されている。「教皇が遺憾の意を示しても、フスや、フス派戦争の多数の犠牲者たちが生き返るわけではない。中世チェコ王国を中世の正常な路線に戻すわけでもない。カトリック教会は今日のあわただしい時代とは別のリズムで動いているのだ。しかしこのほとんど 6 世紀にわたる時間は、カトリック教会の尺度にとってさえ十分な時間であった。その結果として、ヴァティカンからの半端な謝罪は、明らかに何にも影響せず何にも損害を与えなくなった時に届いた。(中略) 今日、教皇の言葉はせいぜいこの国のカトリックとプロテスタントの関係に影響するだけである。それ以外の人々に期待できるのは困惑混じりの共感だけだ。これが歴史的な謝罪及び半分の謝罪の運命である。表明するのが遅ければ遅いほど、熱意も争いも小さくなり、それだけ無関心な拍手が聞こえるのである。』⁽¹⁶⁾ これはかなり辛辣な批評だが、フス自身がすでに「遠い過去の偉人」でしかなくなっている今日、ヴァティカンで行われた少々大げさなセレモニーを冷淡に見つめていたチェコ人の反応をよく示している。

また、同じ日の『今日・若い戦線』紙に載った M. コマーレク氏の論評は、さらに強烈にローマ・カトリック教会の鈍重さを揶揄している。「ヨハネス・パウロ 2 世はヤン・フスの死に深い哀悼の意を表明した。(中略) これに何か意味があるだろうか。(中略) どのように見たところでこの謝罪は、共和国や、説教師についての想像や記憶にとってよりも、カトリック教会にとって重要なのだ。当地ではフスはすでに 10 年間、歴史研究の対象であり、イデオロギー的姿としてはおそらくシャロウン作の彫像と何人かの共産主義者たちの妄想しか残っていなかった。フスはすでに国民のシンボルとして愛されているわけではないし、それで良いのだ。だから教皇の謝罪は、あいも変わらず精神よりも書面を重んじ、慈愛よりも教義を重視し、生きた信仰よりも慣習に従う何十万、何百万のカトリックたちに道を示すものである。』⁽¹⁷⁾ これは、チェコにおいて長年行われてきたフス崇拜を突き放そうとする態度が少々行き過ぎたあまり、いまだにフス解釈の問題にこだわり続けるローマ・

カトリック教会を一種見下すような発言にまで進んでしまったとみなすべきだろう。

しかし、やや別の方面からの批判的意見もある。M. ヘクルドラ氏はシンポジウム2日目の12月16日に『権利』紙上で次のように述べている。「フス派委員会代表、司祭、歴史家であるホレチェク氏は、ヤン・フスがスクリーンのような役割を演じ、そして非神学的で非キリスト教的なプログラムや目的に役立てられてしまうのは遺憾であると述べるが、私は全く賛成できない。カトリック側は、フスを非カトリックの信徒たちから奪うつもりはないという。それならなぜ彼を、宗教的な中世の中にありのままに位置づけるなどと主張して、信仰のない人々から奪うようなことをするのか。」⁽¹⁸⁾ さらに教皇の声明の翌18日には次のように述べている。「声明が遅すぎたという点はともかくとして、少々締めつけるような愛情がフスを窒息させる危険がある。それも一見したところ、いわゆる客観的・真実においてである。そのようなものは、自称客観的（傍点引用者）であることはすでにずっと前から明らかである。遠い過去についての真実の総体などというものは、いつでも、そしてどこでも、それ自体がイデオロギーなのだから。」⁽¹⁹⁾ この発言はやや難解だが、要約すれば、そもそもフスについて「不偏不党の見方」などがありうるのかという疑問、そしてローマ・カトリック教会がこの一見「不偏不党の見方」を掲げることによって、フスがこの大きな普遍的教会の中にとりこまれていくことに対する危惧の表明であろう。

ここまで見てきたフスに関する議論、そしてそれに対する反響は、何を意味するのであろうか。まず、フスに関しては、従来のような党派的視点に強く影響された見方は20世紀の最後になって確かに影をひそめた。民族史観も、社会主義政権の公式イデオロギーによる解釈も、現在ではほとんど克服されているといってもよいだろう。それらの側からの研究成果をも一部引き継ぐ形で、より客観的なフス研究やフス派研究が、今後とも進められていくであろう。同じことはローマ・カトリック教会の側についても言える。過去の決定を完全に否定することは無理にしても、すでに事実上ヴァティカンでは、フスは誤っていなかったことを認めているといつてよい。そうして行われた「謝罪」は、確かに中途半端であり遅すぎるのも事実だが、フスの問題がなおも未解決のまま残されていたことを考えれば、教皇の発言は必要であり、また意義深いものであったことを認めないわけにはいかない。今後は、こうした和解を出発点として、神学者や歴史家たちの合同作業を通して「どの立場にも偏らないフス像」が求められていくのであろう。

しかし、それによって、フスに関心を持つあらゆる人々に受け入れられるフス像が作り出されるのであろうか。そしてそもそもそういったものは存在しうるのであろうか。もしもそれが実現したならば、フスについてそれ以上の議論や研究は必要がなくなるであろう。それは、フスが完全に過去の中に埋没することを意味する。しかし、過去に生じた重大なできごとに関しては、普通そうしたことはありえない。時代が変化し、その時代の要請があれば、再び別の歴史解釈が登場するのは、すでに数限りない実例が示している。

6世紀という時を隔ててフスはついに歴史の中に埋没していくのであろうか。それとも今後もお、新しい時代を反映したフス像が作られていくのであろうか。

〈注〉

- (1) Pánek, Jaroslav — Miloslav Polívka, Jan Hus ve Vatikánu. Mezinárodní rozprava o českém reformátoru 15. století a o jeho recepci na prahu třetího tisíciletí, Praha 2000, pp.111.
- (2) ドイツ語で出版された報告集に Seibt, Ferdinand u. a. (hrsg.), Jan Hus zwischen Zeiten, Völkern, Konfessionen. Vorträge des internationalen Symposions in Bayreuth vom 22. bis 26. September 1993, München 1997. がある。
- (3) 以下、フスおよびフス派についての詳細は、山中謙二『フシーテン運動の研究』聖文社 1948 年（第二版）、拙著『プラハの異端者たち 中世チェコのフス派にみる宗教改革』現代書館 1998 年を参照されたい。
- (4) この教団については、プロテスタントの視点によるものであるが、定家都志男『生けるあかし人 モラビア兄弟団 フス／コメニウス／ツィンツェンドルフの生涯』いのちのことば社 1971 年が詳しく紹介している。
- (5) 以下、20 世紀におけるチェコの教会の歴史は J. Kadlec, Přehled českých církevních dějin 2, Roma 1987, pp.239-244 による。
- (6) ただしこの数字には、カトリック信者の割合が高いスロヴァキアも含まれていることを見過ごしてはならない。スロヴァキアでは 2001 年においても、カトリック信者が 68.9%に達する。
- (7) 1991 年と 2001 年のチェコの国勢調査の数字は、チェコ統計局のホームページ www.scitani.cz による。これらはチェコだけの数字である。
- (8) Hilsch, Peter, Johannes Hus (um 1370-1415) Prediger Gottes und Ketzer, Regensburg 1999, p.289.
- (9) Kotyk, Jiří, Spor o revizi husova procesu, Praha 2001, pp.23-40.
- (10) Kotyk, pp.93-94.
- (11) Kotyk, p.94.
- (12) De Vooght, P., Le hérésie de Jean Huss, Louvaine 1960.
- (13) Kotyk, p.100.
- (14) たとえば『神学思考』（Teologická reflexe）1999 年 1 月号におけるバリ・カトリック研究所の D. R. ホウルトンの発言。
- (15) 『人民新聞』（Lidové noviny）1999 年 12 月 18 日の付録。
- (16) 『人民新聞』1999 年 12 月 18 日。
- (17) 『今日・若い戦線』（Mladá Fronta Dnes）1999 年 12 月 18 日。
- (18) 『権利』（Právo）1999 年 12 月 16 日。
- (19) 『権利』1999 年 12 月 18 日。